

## 呉朗西と中村有楽・伯三父子

——昭和初期の一中国人留学生と日本人との交流に関する調査——

呉 念 聖

一九八八年六月十五日『朝日新聞』朝刊に「中国に日本語学校を 両国シルバーがかけ橋」「日本から教師 今秋にも開校」「東京の中村さんと戦前の中国人留学生ら」「話せぬ留学生の『悲劇』に心痛め…」を見出しとする記事があった。(同年七月十八日、この記事の中国語訳が中国の『上海訳報』に掲載されている。) 関連写真には「中国での日本語学校の開設に努力した中村伯三(右)。一昨年、約六十年ぶりに再会した呉朗西(左)らの協力で実現にこぎつけた(上海市にて)」という説明がついている。撮影された場所は、上海市の呉朗西の自宅である。

千七百字余りの記事は、約六十年ぶりに再会した中村伯三と呉朗西らが中国で日本語学校の開設のためにどのよう<sup>(1)</sup>に努力しているかという内容を主としているので、かれらの過去にはほとんど触れていない。しかしわたしは、かれらがどうい<sup>(2)</sup>う交流をしていたかという過去につよく関心をもっている。いままでの調査結果をまとめ、分析を加えたのは本論である。

明治以降、日本は中国にさまざまな影響を与えてきた。そのルートの一つは、大量来日した中国人留学生である。

呉朗西は一九二五年(大正十四)十月中旬来日、翌年春上智大学入学、三一年十月中旬帰国。在日の六年間、いろ

ろな人、むろんその多数は日本人、と出会った。なかでも、中村伯三・その父中村有楽との交流がもっとも多かった。呉と中村父子との交流はまさしく大正末から昭和初めにかけて日中間の人的交流の一例体例である。

呉朗西は一九〇四年十月六日（光緒三十年八月二十七日）生、九二年二月二十日没、満八十七歳。

中村有楽（本名弥二郎）は一八七三年（明治六）十二月二十六日生、一九四四年十二月二十六日没、満七十一歳。

中村伯三（本名バク三）は中村有楽の次男、一九〇九年（明治四十四）三月十三日生、九八年三月十七日没、満八十九歳。

二五年十月から三一年十月まで、年齢からいえば、呉は二十一歳から二十七歳、有楽は約四十二歳から四十八歳、伯三は約十六歳半から二十二歳半。

青年期の在日体験は間違いなく、呉朗西に大きな影響を与えていた。むろん、影響は一方的なものではありえないし、人間の交流によって培われた友情と信頼は、ときや場合によって、民族・種族・国家間の壁を突き破る力さえももっていた。

本稿では、呉と中村が

1. いつ、どこで、どのように知り合ったか？
2. その後どんな交流があったか？
3. いつ別れたか？ 原因は何か？
4. 再会はいつ果たされたか？ そのきっかけは？

に関する調査の結果を報告するが、しかし単に事実関係の確認にとどまらず、そのときそのときの当事者それぞれの立場、考え、相互にどのような影響を与えあったかを分析し、またその背後に横たわる日中間の時代様相にも言及す

ることになっている。

なお、年代の表記に関しては、つねに日中兩國を意識する必要があるので、原則として西暦を用いる。ことに時代の雰囲気を出したほうがよいと判断した場合のみ、括弧にしてその国の年号を表示することとする。

## 1 出合いに関する記憶

最初の出合いについて、季節まで具体的に示したのは、一九九四年八月に発表された中村伯三の文のみである。

一九二六年春、四川省重慶出身の、当時上智大学の留学生呉朗西氏が、上海の世界語学会会長胡愈之先生の紹介状を持ってわが家を訪れました。<sup>(3)</sup>

いっぽう、呉朗西の一九八六年六月に発表された回想文<sup>(4)</sup>では、中村家訪問の時期は一九二八年春以降となっている。また、引き合わせてくれたのは飯森正芳だと書かれている。

同回想文によると、呉朗西が二八年春、奨学金を獲得してからまもなく、飯森正芳は大阪から東京に引っ越してきた。その後、飯森が、友人中村有楽の家につれて行ってくれたという。

問題は「間もなく」とはいったいどれぐらいの間であったか。

同じ文中、飯森夫妻は東京に引っ越してきてからまず高円寺に住まい、その後横須賀に転居した。二九年春のある土曜日の午後、呉は友人陳瑜清と一緒に横須賀の飯森家を訪ね、夕食はある日本料理屋でご馳走になった。辻潤夫人も来ていた。<sup>(5)</sup> 当時、辻潤はフランスに行っていて日本にはいない。その晩、飯森正芳は機嫌よく、飲まない春枝夫人

を除いて、四人で痛飲したという。

しかし、この「一九二九年春」には問題がある。辻潤がフランスに行ったのは二八年一月、かれは読売新聞の第一回パリ特置員として、前妻伊藤野枝との間にもうけた、十四歳の長男一（まこと）をつれていったが、二九年一月三日、パリから帰国し、東京の大岡山に住むことになっている。<sup>(6)</sup>そのため、もし春という季節に関して呉の記憶が間違っていないければ、二八年の春でなければならない。そのとき、同席した辻潤夫人はおそらく酒好きの小島清<sup>(7)</sup>（きよ）であろう。

また、友人の陳瑜清は二八年十二月に日本からフランスに留学<sup>(8)</sup>したので、二九年春は日本にはいなかったと思われる。

そうすると、「間もなく」の「間」は短い「間」となる。つまり飯森は呉が奨学金を受けた二八年の春に、大阪から東京方面に引っ越してきている。呉が飯森の案内で中村家に訪ねた時間の上限は二八年の春ということになる。

じつは、伯三の「一九二六年春」説にも問題がある。対面の場合は当然、東京にある中村家だと解されるが、中村家が千葉県北条町から東京牛込富久町に移転したのは一九二六年（大正十五）の秋<sup>(9)</sup>のようだ。

だから、もし呉が単独訪問をしたとしても、時間の上限は一九二六年の秋となる。

呉の回想の軸をなしているのは明らかに飯森正芳である。そもそも呉の日本留学は飯森との出会いから始まったことである。二一年の夏、呉は四川省重慶から上海の中学に入学し、その後、胡愈之にエスペラントを習い、二二年、胡愈之の紹介で上海に来ていた日本人のエスペラントである飯森正芳と知りあった。この飯森こそが、呉朗西が終生忘れない師となったのである。

呉は六十年後もなお「飯森先生は士族出身の海軍将校であったが、トルストイズムなどの影響で軍隊を離脱し平和

運動に身を投じた」ということを記憶にとどめていた。飯森の年齢については、すでに五十は過ぎているのではないかと、この当時の印象を同じ回想文に書き記している。

飯森正芳は中村有楽の親友で、有楽の第五子、伯三より十歳年下の弟、正五（一九一九年四月生）の「正」は、「正芳」から一字をとったという間柄であった。<sup>(11)</sup>

飯森正芳と中村有楽およびその子どもたち——長男英一、長女文子、次男伯三、三男日出男と一緒に写真館でとった写真が残っている。伯三によると、それは二年、千葉県館山市でとったものだという。飯森の年齢については「私が始めてお目にかかった時はもう四十歳前後の頃で、父有楽より五、六歳若かったと思います」と書いてある。<sup>(12)</sup>

伯三説を信じるなら、中村有楽は一八七三年（明治六）の生まれなので、飯森正芳は一八七八、九年の生まれだと推測される。そうすると、一九二一、二年ごろは、飯森は四十代前半となる。なぜ、呉の当時の印象とそれほどの誤差があったのだろうか。原因はわからないが、おそらく、初対面時の飯森は、十八歳の呉にとって、よほど成熟した大人にみえたのだろう。

また、同じく呉の回想文によると、一三年二月初めの日曜日、飯森家でエスペランティストでもあるロシアの盲目詩人エロシエンコにも会っていた。その年の夏、呉は上海を離れ、同年末、飯森夫妻も上海から日本に帰ったという。

一九二五（大正十四）年十月中旬、呉朗西は来日すると、まっさきに大阪の飯森家を訪ねた。突然の来訪にもかかわらず、熱烈的な歓迎を受け、飯森家で二泊したのち、飯森について東京へ行き、下宿の世話までしてもらっている。数日後、飯森は大阪に帰ったという。

とにかく、呉の回想にはかれの飯森正芳に対する熱い思いが満ち溢れている。

この回想は一九九〇年十月に日本語に訳され、発表されており、それを伯三は読んだようだ。<sup>(14)</sup>

それに、二人の再会のきっかけをつくった一九八五年内山書店『鄔其山』秋季号（九月）に掲載された呉の「内山さんをめぐる二つの回想」<sup>(15)</sup>にも呉朗西を中村有楽に紹介したのは飯森正芳だと書いてある。

伯三はそれを読んで、呉に連絡をとったのである。つまり、呉朗西の初対面に関する回想を、伯三はすでに読んで知っていた。にもかかわらず、かれはなお「上海の世界語学会会長胡愈之先生の紹介状を持ってわが家を訪れました」という自分の記憶に固執している。

ただ、呉の最初の訪問相手は有楽であって、伯三はその場に居合わせなかったのかもしれない。つまり「上海の世界語学会会長胡愈之先生の紹介状を持ってわが家を訪れました」というのは伯三が父有楽から聞いた話だという可能性も考えられる。

ここで中村家とエスペラントとの関係を確認してみよう。有楽自身はエスペランティストではないが、エスペラントと非常に縁の深い人物である。日本エスペラント協会創立当初の一九〇六年から、一〇年末まで、その事務所は中村有楽が経営する有楽社内に置かれていた。日本エスペラント協会創設期の重要メンバー安孫子貞次郎は、有楽社の支配人であり、中村有楽の親友でもある。エスペランティスト、アナキストの山鹿泰治もまた有楽社の社員であった。大杉栄らもよく出入りしていたという。もちろん、そのころ、一九〇九年生まれの伯三はまだ幼かった。が、年を重ねるにつれて、伯三はエスペラントや社会問題への関心を高めていく。呉が訪ねたころ、かれはエスペラントを熱心に勉強していたようである。<sup>(16)</sup> そのとき、中村家では、長男英一はすでに亡くなっており、十七、八歳の伯三は一番上の男子であった。

以上の状況を総合してみると、呉朗西が中村有楽、そしてその次男伯三と知りあったのは飯森正芳を介してだった

ことにまず間違いなからう。<sup>(17)</sup>

胡愈之の紹介状があったか否かはともかく、胡愈之の紹介、少なくとも胡愈之という名は、口にしたにちがいない。飯森が同行したかどうかはにわかには断定できない。それを断する前に、まず飯森が東京に引越した時期を確定しなければならぬ。いまのところ、その上限は一九二八年の春だと推測される。もし、呉が自分で中村家に行ったのであれば、その上限を一九二六年の秋までさかのぼることができる。伯三の季節に対する記憶を信じるならば、一九二七年の春だと推測される。一九二七年の春なら、吳朗西は二十二歳、訪問相手の中村有樂は五十三歳で、中村伯三は十八歳だった。

記憶とはじつにおもしろいものだ。二人の記憶の違いからまたいろいろなものがみえてくる。二十世紀初頭、封建的、閉塞的な中国にエスペラント、アナキズム、トルストイズム、社会主義、共産主義など西側の新しい思想が入ってきて、それを一所懸命に吸収しようとする青年吳朗西にとって、はじめ（おそらく）会ったエスペランティスト、アナキスト、トルストイアンである日本人飯森正芳はまさしく、革命の実践者であり、アジアにおける思想的先進国日本の道案内をしてくれた伝道師でもある。その人の存在は青年吳朗西にとってはじつに大きかったにちがいない。

いっぽう、少年期を大正デモクラシーのもとで過ごし、父親の関係でいろいろなエスペランティスト、アナキスト、社会主義者、またはダダイストの言動を目の当たりにし、いよいよ自分も行動を起こそうと決心する青年中村伯三の脳裏には、ちょっとしたきっかけで中国人の上海エスペラント学会会長胡愈之という名が焼きついたということも想像できよう。

## 2 中村家は国際交流の場

その後、呉は中村家に足しげく通っていたようである。かれはどうしてそんなに頻繁に中村家を訪ねたか、中村家はいったいどのような場所だったかということについては、伯三が一九八五年十一月に発表した文中で、

中村家には昭和初期、ビルマのオッタマという革命僧、朝鮮人で慶応大学生の高火山（筆者注：不詳）、それに山鹿泰治、飯森正芳らのエスペランチスト、アナーキストが集い、自由な話し合いを続けていた。<sup>(18)</sup>

と書いている。

なお、伯三が一九九五年十一月に発表した文にはもっと詳しい記述がある。

呉朗西さんが毎土曜日の午後は私の家に遊びに来るようになり、彼は私の家に連れて来た中国人は、沈仲九と娘二人、黄源、陳瑜清、張景その他十数人でした。

土曜日の午後は、中国、台湾、朝鮮、ビルマ、ポーランド、ハンガリーなどの学生がわが家に集まって来ていつも社交サロンの状況でした。

ビルマの革命僧オッタマさんが、ビルマの若い女性二人を連れて来て、今日は皆さんにビルマ料理をご馳走しよう、黄色の僧衣をまとったまま台所に立って、私の祖母、母、姉、女中と、二人のビルマ女性共々料理をつくってくれました。



一方応接間では、男女の学生達が、エスペラント、日本語、自国語でワイワイ、ガヤガヤしゃべり、民族衣装をまとい、歌や踊りを披露しているところに、オットマさん指揮のビルマ料理が持ち込まれると、皆さんは拍手大喝采して、大喜びでこれを食べました。

ここでは、国境、民族、宗教の違いなど全く無く、みんなが人間、みんなが兄弟、姉妹でした。楽しい楽しい集会でした。<sup>(19)</sup>

ここに言及されている沈仲九は呉朗西の上海呉淞中国公学の先生だった。当時非常に影響力のあった文化人であり、エスペラント、アナキーズムの提唱者でもある。日本にいたころは、代々木上原に住み、呉が通っている上智大学でドイツ文学の授業を聴講していた。のちに上海江湾労働大学副学長となり、一九二七年八月、山鹿泰治をエスペラントの講師として日本から招いている。<sup>(20)</sup>

黄源は、一九二八年旧正月の直後、来日。陳瑜清と一緒に代々木上原に住む。十二月、陳瑜清がフランス留学に行ったあとは、呉朗西と同じ下宿屋に住む。一九二九年夏帰国。上海で翻訳、出版事業に携わり、よく魯迅とともに仕事をした。呉朗西ともよくつき合っていた。のちに新四軍に入り、共産党の幹部となった。<sup>(21)</sup>

張景は早稲田大学の留学生、山鹿泰治ともつき合っていた。山鹿泰治が上海江湾労働大学に行ったとき、張氏も同大学の教員であった。<sup>(22)</sup> 呉が一九三五年に上海で文化生活出版社を創設するころ、呉との交友関係も続いていたようである。<sup>(23)</sup>

ビルマの革命僧ウ・オットマ (U Ottama、一八七八〜一九三九) は二度日本に来たことがある。ここに書かれているのは二度目の一九二九年(昭和四)のことである。中村家とは、一度目の一九一〇年(明治四十三)来日するとき

に、すでにつき合いがあったようである。<sup>24)</sup>

中村家がこのような国際的な文化サロンの様相を呈したのは、決して偶然ではなかった。そこには伝統があった。ここで、中村有楽のそれまでの経歴を簡単に確認しておく。

中村有楽は京都市中京区で生まれ、一八八七年（明治二十）、十四歳で貸本兼小売業の便利堂を開業、翌年、出版許可を得る。月刊誌「文芸倶楽部」や単行本、猪熊夏樹の『福島中佐歓迎軍歌：万里遠征』などを出版。九五年六月頃から翌年九月まで、不敬事件で失職した内村鑑三を自宅の離れに住ませ、月額二十〜三十円の生活費を援助し、九七年に内村鑑三の『後世への最大遺物』を便利堂から出版した。

一九〇四年（明治三十七）、東京麹町区有楽町三丁目一番地で有楽社を創立、「英文少年世界」、「手紙雑誌」、風刺漫画雑誌「東京パック」、写真雑誌「クラフック」などをつぎつぎ創刊。長男英一の「英」、長女文子の「文」、第三子で次男バク三（伯三の本名）の「バク」はみなそれらの雑誌の名に因んだものである。その業務は十二年（明治四十五）七月頃までつづいた。

また、上述したように、一九〇六年、日本エスベラント協会創立時、その事務所は有楽社内にな置かれていた。

有楽社倒産後も、雑誌「土地と家屋」や「楽土の房州」などを創刊したり、安房美術会を結成したり、普及社を創設したり、個人的に発行者として宮崎虎之助の三部作（『予言者の生活 自己礼拝自己祈禱』、『光子の声其他』、『予言者の御臨終に待して其他』）を出版したりした。

一九一四年（大正三）、千葉県北条町に転居したが、二三年の関東大震災、翌年長男英一の死をへて二六年（大正十五）秋、東京にもどり、牛込富久町に住むことになった。

有楽社から刊行された「東京パック」や「クラフック」には、日本語だけでなく、英語や中国語の説明も併記さ

れ、そこに有楽の国際感覚が反映されている。英語やエスペラント、社会情勢に敏感に反応し、つき合いもひろく、いろいろな人、たとえば二葉亭四迷、黒板勝美、大杉栄、堺利彦山、野口雨情などもよく有楽社に出入りしていた。前に述べたように山鹿泰治は有楽社の社員であった。

つまり、有楽は人をよび寄せる魅力に溢れた人間であった。かれの家——中村家が国際文化サロンになっていたのもそれに負うところが大きい。

中村有楽は中国のこともとても好きなのである。一九二二年、かれは妻のきぬと一緒に三ヶ月間中国旅行に出かけている。またかれは、勉強がよくできる三男の日出男への褒め言葉として、「日出男は雲南省に生まれ、読書人になるとよかったな」(筆者注・根拠不詳) <sup>(25)</sup> といったことがある。

有楽だけでなく、当時二十歳前後の伯三も中国に対して大いに興味を示していた。呉と二人は年齢が近く(呉は伯三の亡くなった兄英一とは同じ年)、たちまち意気投合し、ときどき伯三も呉の下宿屋に足を運んだという。伯三は中国の長袍を着て呉と二人で銀座を闊歩したこともあった。 <sup>(26)</sup>

また、二九年三月十三日で満二十歳の伯三は呉に、「兵役は国民の義務ですから、わたしは反対いたしません。しかし、いまの日本軍人は日本帝国主義の侵略道具となっています。とくにあなたの中国と戦うなんて、わたしはほんとうにしたくありません。いま、わたしはなるべくご飯を食わず、牛乳とたまごだけを食べています。もしわたしの体重が入隊条件に満たなかったらいいな」 <sup>(27)</sup> という悩みを打ち明けたこともあった。

### 3 惜別

いよいよ呉朗西が上智大学の卒業を迎えようとするときに、「九・一八」事変つまり満州事変が起こった。 <sup>(28)</sup>

前にも引用された、一九八五年呉へのインタビュー記事<sup>(29)</sup>によると、かれは当時のことについて、

一九三二年に（柳条湖事件）がおこり、私は日本にいらるのがつらくなって、十月に帰国しました。その時、私たち中国人留学生は、帰国の前日に神田の中国青年会館で、東北死難同胞の追悼会を挙行したのです。参加した留学生の数は、何百人にも達しましたが、日本の警官隊が周りを包囲し、学生たちが演説することを許さなかった。その横暴ぶりに、私たちは激高したものでした。

追悼会のあと、私が別離の挨拶のために中村家を訪ねると、お父さんがいろいろと慰めてくださった。帰国を思いとどまるようにともいわれました。ただ、抗議と怒りの気持ちでいっぱいだった私は、帰国の決意だけを語るほかはなかった。すると、お父さんは和服を一枚もってこさせ、私に着るようにとすすめた。着てみると、丈が少々長い。お父さんは娘さんと呼び、長い部分を切らせた。

翌日、私のほうは和服のことなど、すっかり忘れていた。ところが、帰国の見送りにきた伯三が、ちゃんと仕立てられた和服を持参し、家族からの贈り物だといって手渡してくれたのです。

と述べている。

呉の別の回想<sup>(30)</sup>にも同様な内容がみられるが、さらに以下の二点が加えられている。一点は神田の中国青年会館で集まった留学生たちは警察の干渉に、一斉に靴底で床を擦って音をたて、抗議の意を表したということ。

もう一点は、中村家へ別れを告げに行ったとき、有樂老人はとても悲しかったが、しばらくして笑顔を装って呉に、「わたしたち、相撲をとりましょう。もしきみが勝ったら、もう帰らなくてもいいでしょう」と提案した。それ

に対し呉は黙ったままであった。そこで、有樂は「きみの帰国を止めることはできません。それでは、和服を一枚差し上げましょう。」と言ったのである。

「九・一八」事変後の在日中国人留學生の状況について、實藤惠秀は『中国人日本留學史稿』<sup>(31)</sup>中でこう書き記している。

東四省留學生：事變勃発には甚大なる衝動を受け、…急遽行李を纏めて天津方面に向い引揚げ者百余名、…中には日本に居残り、排日的宣傳を試みて放逐せられた者もあった。

一般留學生：もう九月十九日以来登校をしなくなった。最初かれ等はその進退に迷っていたが、九月二十三日、大岡山の東京工大の留學生一同、一致行動を取るに決し、二十九日には大阪、京都、仙台、名古屋、長崎の留學生も参加して中華留日學生会を組織し、自国公使館に帰国旅費を請求すると、…十月八日に至り留學生監督処から、帰国留學生の一部に乗船券を発行することになり、十月十日に十九名の學生が上海に帰国したのを始めとして、十二日、十五日と順次帰国し、旅費自弁で帰国する者も続出し、十月末には學生會幹部も殆ど帰国し、…陸軍留學生：…三百名に近かったが、…十月末に殆ど帰国し、残留者は二十数名に過ぎなかった。

#### 4 五十四年ぶりの再会

一九四九年一月二十一日に、中国の漆を日本に輸出する仕事で吳朗西は再び日本の地を踏んだ。約十八年ぶりのことだった。

日本到着の二日後、呉はかつて自分がよく通っていた中村家のあったところに行ってみたが、そこは一面の空地で

あった。呉は悲しくてまたとても心配した。かれは、中村家が東京大空襲の前に、すでにここを離れていたことを知らなかったのである。

そのときの来日の仕事は、呉が帰国後上海で知り合った友人内山完造が協力してくれた。そのため、滞在中は内山とはよく行動をともにした。また、上智大学を訪れ、多くの同級生に会い、母校に寄付もした。

当初、漆輸出で得た代金で日本の紙を中国に輸入しようと考えて、比較的長期滞在の計画をたてていた。ところが、来日後、中国人民解放軍がまもなく家族のいる上海に入るといふ情報が入り、急遽、予定を繰り上げて、四月二十五日に帰国した。本をたくさん購入して船で帰る予定も変更、来日時同様、飛行機便で帰ることにした。そのために、ゆっくり中村一家を探すことができなかった。

けっきょく、再会はさらに三十六年の歳月を待たねばならなかった。

上記の内容は、一九八五年呉へのインタビュー記録の一部として発表されている。<sup>(32)</sup>

帰国後におこった「一・二八」(第一次上海事変)の戦火で、このまごころのこもった和服も、留学中に買求めたたくさんさんの書籍もろとも、すべてが焼けてしまいました。

その後は抗日戦争の時代が続き、中村伯三さんとの音信もとだえた。私は四九年の来日の際、伯三さんの消息を一所懸命に捜しました。だが、中村家のあった旧麻布区は戦火にあったとかで、なんの手がかりもえられませんでした。彼は戦死したのでしょうか。私はこの大切な旧友の消息を、いまなお、どうしても知りたいと思っています。

偶然にも、これが伯三の目に触れ、再会の実現につながった。伯三は内山籬を通して、呉の住所を知り、すぐに手紙を出した。

久闊、久闊、大久闊。

「どっこい 俺等は生きている」を地でゆく様な喜しさがこみあげて来ます。貴台が元気で生きていてくれたことは、何といううれしいことでしょう。惨虐な日本軍が二十万にも及ぶ貴国人を殺害したので、貴台も戦線で勇敢に闘って戦死されたのではないかと勝手に思っていました。戦後日本にも来られたのにお目にかかれず大変残念でした。私たち男の三兄弟は、食い物をへらして、やせてやせて兵役を拒否して人を殺さずに済みました。内山さんに電話で伺ったところによると「貴台は歩くのに少し御不自由の様子だが大変元気です」とのことで大変喜んでおります。飯森正芳さん、私の父有楽、母きぬ、山鹿泰治さんなどいづれも死去されました。

というような文面であった。

文通後、行動派の伯三はすぐに上海に行くことにした。

「あかばね漫歩」<sup>(33)</sup>一九八五年十一月号の「五十五年ぶりに中国の友と再会 桐ヶ丘団地W14 中村パク三（七十六歳）」という記事によると「その中村さんが十月二十三日、一週間の予定で上海へ旅立った。」と書いてある。

この記事は出発前に書かれたものである。結果として、呉朗西が「飯森正芳先生を追憶する」の「付記」で「一九八五年十一月十五日、中村伯三氏が上海に来られ、我が家に三日泊まりました。」<sup>(34)</sup>と書いたように、再会は一九八五年十一月十五日に実現され、五十四年ぶりの再会だった。そのとき、呉は八十一歳、伯三は七十六歳、有楽は四十

年前にもう亡くなっていた。

ところで、本文冒頭にあげた一九八八年六月十五日『朝日新聞』の記事では、中村伯三と呉朗西との再会は「一昨年」、つまり一九八六年となっている。調べてみると、どうも伯三は、それ以降もほぼ一貫して、再会の年を一九八六年にしており、五十五年ぶりの再会と認識している。

たとえば、伯三は一九九三年三月に発表した文中で

内山完造さんの甥の内山籬内山書店社長が一九八六年に呉朗西氏を訪ねた記事を「鄔其山」の九月号に掲載しました。その中に中村伯三の行方を探していることが書かれてあり、私の友人達がそれを読み、私に通知してくれました。そんなことから、私と中国の老友達との交流が五十五年振りに復活し、以降私が十数回訪華し……<sup>(35)</sup>

と書いている。

ここの呉を訪ねた記事を載せた「鄔其山」の刊行が八六年ではなく、八五年であるべきだ。どうも中村は最初から五十五年ぶりの再会だと思ひこみ、それをもとに、別れた年の三一年から数えて、八六年になってしまったという可能性大である。

記憶違いは、伯三が呉と再会后、十数回も訪中し、その数があまりにも多いことに起因していると思われる。最後の訪中が九三年十月だとしたら、八五年十一月からの八年間、七十六歳から八十四歳までの伯三は、十数回も行き来している。とりわけ、八八年十一月中国浙江省嘉興市での日嘉日本語学校の開校のために、相当奔走した様子が見える。<sup>(36)</sup><sup>(37)</sup>



再会の土産に、伯三は父親にならって和服を贈った。それに対し、呉は次のような詩をつくって伯三夫妻におくった。

中村伯三兄・久子嫂留念

君今贈我和服新， 重暖我身更暖心，

「历尽劫波兄弟在」， 日中兄弟永相亲。

吳朗西

一九八六年七月十六日

(君いま我に新たに和服を贈り、ふたたびわが身を暖め更に心を暖む。

劫波を歴尽して兄弟あり、日中兄弟とこしえにあい親しむ。)

ここの「歴尽劫波兄弟在」は、魯迅作「度尽劫波兄弟在」(『題三義塔』)によると思われる。原作の次の句は「相逢一笑泯恩仇」である。つまり、長い歳月を経ているいろいろなことがあったが兄弟はやはり兄弟であり、会って笑いかければ、どんな恩讐も越えられるという意味を表している。

## 5 相互影響

伯三は呉が心配したように、やむを得ず戦争に駆り出されて戦死したというわけではなかった。かれは、呉帰国の翌年の三三年七月、日本共産党に入り、三三年一月に逮捕、四月二十六日起訴され、<sup>(38)</sup>三年余り投獄された。また、弟

の日出男も正三も終始戦争反対の姿勢を貫いた。<sup>(39)</sup>

いっぽう、呉も、伯三の思ったように「惨虐な日本軍が二千万にも及ぶ貴国人を殺害したので、貴台も戦線で勇敢に闘って戦死されたのではないか」ということにはならなかった。ここで呉が帰国後歩んだ道をたどってみよう。

三二年八月より福建泉州平民中学で教員をし、三四年の初より上海で『美術生活』、『漫画生活』編集に携わり、かたわら立達学園で教鞭をとった。三五年五月、文化生活出版社を創設、まもなく、日本から帰国した巴金を編集長として迎え入れ、それから、五四年公私合営まで、魯迅をはじめとした数多くの文学者の著訳書を世に問い、中国文化史上に大きな足跡を残した。奇しくも呉は有楽同様、社長の立場から、出版社を財政的に支え、多くの文化人と交わり、多くの作家や翻訳者を育てた。抗日戦争の間は、上海から重慶に出版社を移し、消費合作社などの仕事にも携わった。戦後、文化生活出版社の資金調達のため、銀行や貿易会社の仕事もしたが、最後はやはり、出版社にもどり、一出版人、文化人として一生を全うした。『朝日新聞』の記事では、呉朗西は「上海市共産党幹部だった」と書いてあるが、誤りである。

青年期を日本で過ごした呉朗西は、日本に行く前に上海で過ごした時期も含めて、日本から受けた影響がきわめて大きい。なかでも、のちに同じ出版人として歩みだす呉に、大正デモクラシーの醸成にも助力したと思われる一明治文化人——年齢的にも、また呉本人の言葉にもあるように、父親のような存在であった中村有楽の影響が色濃く見られる。

いっぽう、留学生呉朗西の言動も中村家に影響を与えないではおかなかった。「九・一八」事変後、多くの留学生が帰国した背景があったとしても、何年も親しくつき合ってきた呉が日本の侵略に憤慨し、もう少しで長年の努力が報いられる卒業を目前にして、帰国を決意したことは、中村父子にとって大きな衝撃だったであろう。

戦後、伯三は地域活動、地域文化においてリーダー的な役割を發揮し、「北郊文化」や南北社を主催して、最期まで気骨のある言論を発し続けている。

注

(1) 筆者は呉朗西の三男である。さる二〇〇四年十月、上海魯迅紀念館で開かれた呉朗西生誕百周年記念大会ならびに学術シンポジウムで、調査成果の一部をまとめ、「对青年呉朗西有影响的几个外国人」（青年呉朗西に影響を与えた二、三の外国人）を題に発表した。その発言をもとにした論文が上海文芸出版社刊、上海魯迅紀念館編「上海魯迅研究」二〇〇五年春季号に掲載されている。あわせて参照されたい。

(2) 在日中、呉朗西は呉朗熙の名を使用した。中国語の発音では「熙」は「西」と同じである。上智大学の、大正十五年留學生調（大正十五年五月現在）の文学選科一年に、昭和三年度六月現在留學生名簿の本科一年文科の十八名の中に、昭和四年度名簿の文科一年（六名）に、昭和六年度職員學生生徒名簿の文学部文学科四年度學生（第三学年）の三名の中に、みな呉の名がみられる。上智大学保存の、昭和三年十一月十三日に中華民國駐日留學生監督処宛の証明書（控え）によると、呉は昭和三年度、本科一年の入學試験に合格し文科の予科選科生から正科生となったこともわかる。呉本人の筆者への手紙によると、奨学金受領の資格問題で本科一年に二年間在學したそうである。なお昭和三年度六月現在留學生名簿によると、呉の住所は「府下高田町雜司ヶ谷水久保一一九松村方」である。

(3) 中村伯三「世界版發行の辞」『古壽千幅』国際版、南北社、一九九四年八月、三八頁。『古壽千幅』国際版が刊行される前の一九九三年三月に、その日本版が刊行されている。そこにある中村伯三「日本版發行の辞」にもほぼ同様な内容が書かれているが、唯一の違いは「一九二六年春」でなく「一九二六年」であった。なお、『古壽千幅』は呉朗西の葬儀に参加した中村伯三に、呉の遺族が贈った中国で出版された本であるが、中村氏の手によって日本で翻訳出版された。

(4) 呉朗西「忆飯森正芳先生及其他」（追憶飯森正芳先生）、上海市編輯学会編『編輯學刊』（季刊誌）一九八六年第二期、学林出版社、一九八六年六月。文末に執筆時期は一九八二年六月と記されている。本稿中の引用に関する日本語訳の文責は筆者にある。

(5) 前掲注(4)「忆飯森正芳先生及其他」によると、一九二五年十月、飯森正芳が辻潤、秋田雨雀をつれて呉の大岡山の下宿屋に来たことがある。

- (6) 玉川信明『放浪のタダイスと辻潤』社会評論社、二〇〇五年十月、二五六・二八二頁参照。
- (7) 前掲注(6)『放浪のタダイスと辻潤』参照。
- (8) 「黄源年譜」(上海魯迅紀念館編『黄源紀念集』中国福利会出版社、二〇〇六年四月、四二〇頁)と『黄源回憶録』(浙江人民出版社、二〇〇一年九月、四三頁)参照。本稿中の引用に關する日本語訳の文責は筆者にある。
- (9) 「中村日出男略年譜」(『流れやまめ小川のように―エスベラントティスト中村日出男遺稿集』リベロイ社、二〇〇六年十月)によれば、中村家は「大正末、東京転居」(三五二頁)となっており、中村正五の「思い出の家族小史」(『対酒―中村バク三』私家版、一九九九年四月)によれば、「僕が小学校の一年の秋、牛込富久町へ転居しました」(一八六頁)となっている。
- (10) 前掲注(4)「忆飯森正芳先生及其他」参照。
- (11) 中村伯三「飯森正芳という快男児」、『北郊文化』復刊六号、南北社、一九九六年二月。前掲注(9)『対酒―中村バク三』所収。
- (12) 前掲注(9)「飯森正芳という快男児」参照。写真は『対酒』所収同文に付されている。
- (13) 一九二三年二月の日曜日は、四日・十一日・十八日・二十五日である。高杉一郎『夜明け前の歌：盲目詩人エロシエンコの生涯』(岩波書店、一九八二年十二月)によると、エロシエンコは一九二三年一月三十一日に北京から再度上海入り、飯森正芳の家に泊まり、二月六日に飯森夫妻らと杭州小旅行に出かけ、十七日に上海にもどった。二月初めの日曜日だったら、四日であろう。
- (14) 前掲注(4)呉朗西「忆飯森正芳先生及其他」の一部は藤井省三によって引用の形で邦訳されている。「ある中国語教官の昭和史―若き巴金との出会い、別れ、そして忘却―」第十二回(『東方』一一五号、東方書店、一九九〇年十月)参照。それを読んだ中村伯三の感想を筆者は直接に聞いたことがある。その際、藤井氏文中の「呉朗西の知名度」うんぬんに關してすこぶる不満を表していた。
- (15) この文章は同じ一九八五年七月三日、呉朗西の上海の自宅を訪問した内山書店内山籬社長によるインタビュー記録である。
- (16) 蒲豊彦「中村有楽とその子どもたち」(『流れやまめ小川のように―エスベラントティスト中村日出男遺稿集』リベロイ社、二〇〇六年十月)によると、「日出男氏は、東京府立四中二年生のとき(一九一九年前後)、エスベラントを学びはじめるが、そのころエスベラント講座に通っていたバク三氏から発音を習い、あとは自分で勉強した。そんな日出男氏に、山鹿泰治は容赦なくエスベラントを話しかけてきた」(三三七頁)という。ただ、同書「中村日出男略年譜」によると、ときは「一九二八年」(三五二頁)となっている。また、再会前に中村伯三が呉朗西に出した手紙の中にも自分の両親、飯森正芳のほかに、山鹿泰治の死に言及して

- いる。呉と山鹿とのつながりよりも、呉とつき合ったところ、エスペラントに熱中していた伯三には山鹿と呉がだぶってみえたと思われる。本文第四節「五十四年ぶりの再会」に引用された中村伯三書簡参照。
- (17) この点について、中村伯三も「飯森正芳という快男児」(前掲注(11)参照)中で「飯森さんは…上海では中国のエスペラント学会長の胡愈之さんともよくつき合われ、日本への留学生を私の父に紹介して来たものです。」と認めている。
- (18) 「五十五年ぶりに中国の友と再会 桐ヶ丘団地W14 中村バク三(76)」「あかばね漫歩」一九八五年十一月号、赤羽商店会連合会。
- (19) 中村伯三「国境、民族、宗教の違いを越えて」「北郊文化」復刊三号、南北社、一九九五年十一月。「わが家の楽しい 戦前からの国際交流」の第一節として前掲注(9)『対酒——中村バク三』所収、一五二頁。
- (20) 向井孝『山鹿泰治 人とその生涯』青蛾房、一九七四年五月、一一九頁参照。
- (21) 前掲注(8)『黄源年譜』と『黄源回憶録』参照。
- (22) 前掲注(20)『山鹿泰治 人とその生涯』一一九頁参照。
- (23) 呉朗西「文化生活出版社的創建」『新文学史料』一九八二年第三期、人民文学出版社、一九八二年八月、一九五頁参照。なお、この文は青谷政明によって日本語に訳されている。「文化生活出版社の創立について」『中国研究月報』一九八三年二月号、中国研究所。
- (24) ウ・オッタマと中村有楽の弟竹四郎とが一緒に取った写真がみられる。前掲注(9)『対酒——中村バク三』一六九頁参照。そこに映っているオッタマ氏の年齢はどう見ても五十代にはみえず、英姿颯爽たる三十代である。竹四郎は一八八九年生まれなので、弱冠二十の青年であった。そのとき、かれは兄有楽を助け、有楽社「クラフック」のカメラマンとして活躍し始めたころであった。
- (25) 中村正五「私の記憶に残る兄：中村日出男の実像」(二〇〇六年三月執筆)『流れやまぬ小川のように——エスペランティスト中村日出男遺稿集』リベローイ社、二〇〇六年十月、三〇五頁。
- (26) 前掲注(4)「忆飯森正芳先生及其他」参照。
- (27) 同上。
- (28) 注(2)参照。呉は一九三一年度は三年生なので、三三年三月の卒業見込となる。
- (29) 注(15)参照。呉朗西「内山さんをめぐる二つの回想」(インタビュー、内山籬記)『廓其山』秋季号、内山書店、一九八五年九月。

- (30) 前掲注(4)「忆飯森正芳先生及其他」参照。
- (31) 實藤惠秀『中国人日本留学史稿』日華学会、一九三九年三月、三〇〇頁より。原文は旧仮名遣いをつかっているが、ここでは現行の表記になおしてある。なお同氏『中国人日本留学史』くろしお出版、一九六〇年三月、一二六頁よりも概ね同様な内容が書かれている。
- (32) 注(15)(29)参照。
- (33) 前掲注(18)「五十五年ぶりに中国の友と再会」参照。
- (34) 前掲注(4)「忆飯森正芳先生及其他」参照。
- (35) 前掲注(3)中村伯三「日本版発行の辞」参照。同じ注(3)中村伯三「世界版発行の辞」にも「一九八六年九月、私たち旧友は五五年ぶりで再会が出来た」と書いてある。
- (36) 二〇〇〇年十月上海文芸出版社刊、上海魯迅紀念館編『呉朗西先生紀念集』、三四四頁に載っている呉の長女呉西柳の文によると、中村先生が一九九三年十月初めにわが家に來られたとき、自分はもう年なのでおそらく今回の最後の訪中になるでしょうと話されたという。なお、そのとき、伯三氏は、『古壽千幅』の初版日を一九九三年三月七日にしたのは、呉朗西追悼会の一周年を記念するためであり、再版日を一九九三年八月十五日にしたのは、その日亡くなった呉朗西夫人柳静を弔うためであると語ったそうである。
- (37) 朝日新聞の記事の日付は一九八八年六月十五日、その中に書かれた「今秋にも開校」する日本語学校はつまりこの日嘉日本語学校のことである。中国側の主要な協力者は黄源である。前掲注(8)「黄源年譜」にも「一九八八年十一月末、黄源は中村伯三と嘉興高専と合併する日本語学校の開校式に参加するために嘉興へ行く」(四四一頁)と記してある。しかし、一九九四年八月に南北社刊『古壽千幅』国際版中の、中村伯三「世界版発行の辞」では「一九八七年十一月」とされている。
- (38) 『日本共産党の運動状況』内務省警保局保安課「特高月報」昭和八年四月分。
- (39) 中村日出男「私たち三人兄弟は一人も戦争に駆り出されなかった」、中村正三「真実を教えてくださいました一冊の本 それを僕を戦死から守ってくれた」、中村バク三「私は殺されたくない、だから人も殺さない」、中村伯三『無遠慮のすすめ』北郊文化、一九八四年二月、二五七〜二七〇頁。同じ題で前掲示注(9)『対酒——中村バク三』に再掲、一七〇〜一七七頁、内容は若干変化あり。

以上示した資料以外、主に参考したものは次の通りである。

陈思和・李辉「记文化生活出版社」(文化生活出版社について)『新文学史料』一九八二年第三期、人民文学出版社、一九八二年八月。  
乔丽华『吴朗西画传』(吴朗西画传) 中国福利出版社、二〇〇四年十月。

野口存彌「山上の人——中村有楽の生涯をめぐって」『野口雨情 詩と人と時代』未来社、一九八六年三月。

〔追記〕

本稿提出後、幾かの事実が判明した。たとえば、飯森正芳は一八八〇年(明治十三)六月二日に生れること、かれが大阪から東京に居を遷じたのが一九二七年秋頃であること、等々。調査はなお進行中で、いずれ飯森正芳という人物に焦点を当てて文をまとめようと思う。